NPO/ SORUCA 通信
NonProfit Organization/Soft Resouces of Urban and Country Association
春 2017

会員　各位殿

平成29年5月9日
ＮＰＯソフトインダストリー研究会
理事長　白石　嘉宏

巻頭言

時代は繰り返すか

　この原稿は5月4日に書いています。マスコミは連日北朝鮮の動向を報道しています。報道は常に目の前に起こったことをテーマにMCの誘導によりコメンテイターが話をしてくれます。さて、そのような報道は報道として今回の切迫した事態になった背景を考えましょう。この問題の根本は経済問題だということは衆目の認めることでしょう。このようなことは世界規模で見れば何度も繰り返されています。第一次世界大戦のあとドイツは敗戦国となり多額の賠償金を背負い、その経済混乱と貧困から抜け出そうとヒットラーの抬頭を認め、第二次世界大戦に入りました。 日本も農村の貧困を見て青年将校が226事件を起こし、その後経済の拡大を図ろうと満州に進出し日中戦争、それがABCDライン（Aはアメリカ、Bはブリテン、Cはチャイナ、Dはダッチ）という経済封鎖を受けることになり、石油の備蓄が残り1年となった時「窮鼠猫を噛」のたとえ通り真珠湾攻撃という暴発をしました。
第二次大戦で日本が破れましたが 。 当時朝鮮半島の南部（今の韓国）は農村地帯で貧しいところでした。 一方北部（今の北朝鮮）は地下資源と工業が発展していて豊かでした。
1956年日本がなべ底景気で経済が低迷しているとき千里馬運動により急速な経済発展をしている、完全就職、完全保護ということから1959年から 1980年代初頭まで豊かさを求めて日本から日本人妻を含め93,340人が北朝鮮に渡りました。その後韓国は1965年日本と日韓基本条約を結び、往時の韓国の国家予算が3億ドル程度のところ日本から無償3億ドル、 有償2億ドル、民間借款3億ドル以上を手に入れ漢口の軌跡と言われる経済復興を 成し遂げました。この間北朝鮮は政策の失敗が続き 経済は衰退し南北朝鮮の経済力は 大きく逆転しました。
さて、第二次世界大戦では 1935年、 ドイツはヴエルサイユ条約を一方的に破棄して再軍備を行った。イギリスのチェンバレンはドイツがそれ以上軍備の拡張や他国への侵入をしないようにという宥和策を取った、アメリカも戦いを避けるため日本に経済制裁を行うことで日本が屈服する道をとった。結果はいずれも戦争になった。今、北朝鮮に行っている経済制裁と過去の歴史の宥和策とを冷徹に見なければならない。時間の経過は軍備の拡張が続きその中でますます経済的切迫を大きくしてゆく。

SORUCA 通信　contents

■ 巻頭言 / 時代は繰り返すか　/ 白石 嘉宏
■ グローバル化と保護主義　/渡辺 勝範
■ ３０年の歴史にみるオーストリーと日本のスキー場産業 / 坂倉 海彦
■「見たことしたこと」　白石回想録―10
■ 編集後記 / 渡辺 勝範

グローバル化と保護主義

金融資本主義の拡大は世界経済のボーダーレス化をもたらした。そしてグローバル化は同時に情報のみならず、移民などの人間の移動をいっそう加速させた。
グローバル化はヒト・モノ・経済の脱境界化のなかで、特に人間の移動が異なった者同士の接触を促し、異質なものが出会う中で紛争が多発している。異質な文化、文明、宗教のもの同士が接触すれば、他者を区別し、自分たちのアイデンティティを自覚する。 しかもアイデンティティの自覚は敵を悪魔に仕立てることによってより高まる。

テロリズムの背景、移民問題、自由貿易から保護貿易への動き、中国の覇権主義、など自分の利益、自分の主張する世界観を顕示することが最優先とする現れである。そして英国の 欧州連合からの離脱、米国の新大統領ドナルド・トランプの自国の利益を 優先する保護主義の政策はグローバル化から 保護主義への 潮流の変化の象徴的な動きである。

人類の歴史を考えると、ネアンデルタール人が３万年前に絶滅するまでに、実に１０万年以上の間をかけ新興のホモ・サピエンスはアフリカから全大陸に住みついていった。ある意味、争いと戦いの歴史であった。人類はもう１０万年もの間、どうしたら戦争のない世界ができるか模索してきた。そして今も同じことを考えている。気候の変化、自然災害など環境の変化による生存の危機をも乗り越えてきた。４５億年前に地球が誕生し、７億年かかって有機体（生物）が誕生した。それから３７億年もかかってアフリカでヒト が進化した。

現在の人類のひとり一人にこの地球誕生からの４５億年の記憶が引き継がれている。まさにグローバル化と保護主義の繰り返しの歴史である。あたかも振子が右・左と揺れるように、大きく揺れれば、反対に大きく揺れもどる。自然の理そのものである。

（渡辺　勝範）

30 年の歴史にみるオーストリーと日本のスキー場産業

1990 年代中頃 日本のスキーが ブームを超え始めたころ、 当時の白石嘉宏余暇開発センター研究部長の提案で、池袋のサンシャインシティーで毎年行われていたウィンターリゾートというイベントの参加団体を中心にスキーの場、交通、用品用具、学校などの関係者が集まり、力を合わせてスキーの活性化をしようという趣旨のもとに、現在の NPO ウィンターレジャーリーグ（通称 Will）の原型が結成され、当時スキー場の市場調査、 開発や経営のコンサルテーションなどを手掛けていた坂倉が「国内のスキーに関する事情をよく知っているから」という理由で事務局長をお引き受けすることになった。それ以来 20 年以上地味ながらボランティア的にその役をこなしているが、小生のアシスタントの高浜裕子さんの頑張りと気遣いで何とか継続出来ているというのが実情である。

WiLL 設立の 10 年ほど前の 1986 年の早春、日本ではリゾート開発が盛んになりスキー場の新設が進み始めたが、まだスキーブームというほどには至っていない時期である。スキー場の相談に乗ることが多くなっていたので毎年世界の先進事例を視察、カナダ、フランスなどをすでに見ていたが、この年はスキーの故郷ともいえるオーストリーのチロルを訪れていた。有名なサンアントンやキッツビューエルを見ての感想は、大きいけれど施設などは老朽化しておりこのままで大丈夫かなというものだった。街並みや宿も何となくうらぶれていたような印象がある。

親しくしている野沢温泉や白馬の方から、「最近のチロルのスキー場はとても良くなっている」と言う話を最近よく聞くようになったので、 この３月に駆け足で視察に出かけてみた。実に３１年ぶりである。

率直に言って大きなカルチャーショックを受けた。 素晴らしく良くなり大いに繁盛している様子なのである。温暖化で雪が少なくなっているため標高の低いところから高いところへ滑走エリアを拡大、そのための最新の巨大なゴンドラと機能的によく考えられた周辺施設が各地で建設され、美しく整備された街並みも伴い、実に魅力的なリゾートに生まれ変わっていた。たまたまサンアントンを訪れた平日は あいにくの春の雨、それでも昼時の街は多くの人々が楽しそうに歩いており、飲食店も外から覗くとお客で一杯 。

１５年ほど前だったと思うがオーストリーのスキー関係者に「オーストリーのスキー場は８０年代に危機を迎えたが、その後スキー場も宿も必死になって努力してすっかり作り替えたので２１世紀になって立ち直ってきている」という話を聞いたことを思いだしたが本当だったと確信をした。

　そして３１年前と今日の日本のスキー場産業について思いをはせた。前回小生がオーストリアを訪れた２～３年後から日本では空前のスキーブーム、それに酔った産業側はブーム需要の本質を見ずに我先にと事業を拡大、投資を促進した。健全成長時代は所得の上昇に応じてスキーを楽しもうという趣味の需要も少しずつ大きくなったのだが、ブームになると「皆がやっているから」という動機で多くの人々がスキー場に群がるバブル需要に変質してきた。バブルは所詮バブル（泡）、時間がたてば必ず消える。「皆が行くから」という理由でスキー場に群がっていた人々の多くが「皆が辞めたから」という理由でスキー場から去っていったのである。そして後に残されたのが作りすぎたリフトやゴンドラ、多すぎるにわか作りの粗末な宿や食堂等々。スキー場産業全体を供給過剰という健全な経済活動が成り立ちにくくなる環境が覆う。スキー場を減らそうとしてもそれができにくい規制の存在や経済性無視の地元のエゴ。今のスキー場産業は施設が老朽化し、（利益を生まないと考えられている）スキー場施設更新の投資ができず、そう遠くない将来に消滅してしまう恐れさえあるのだ。

　歴史を振り返って「もし」を考えることは現実的でないことはわかっているが、それでも「もしあのスキ―バブルが無かったら」日本のスキー場産業もオーストリーのように正常進化できたのではないか、と思わずにはいられなかった。もちろんこの３０年の間に国全体の経済のバブル崩壊とその後の経済の停滞の影響を受けたことは確実であろうし、日本のスキー場事業者や地域の関係者がオーストリーレベルのまとまりや努力をできたかには疑問があるが、それでも国内にある程度の数の、時代に合った正常進化を遂げた魅力的なスキー場エリアが存在する状況になっていたのではないか。こう考えると本当にもったいない３０年間を日本のスキー場産業は送ってしまったものである。

オーストリーのスキーリゾート利用人口の実態などの統計を持っているわけではないが、雪の確保ができれば決してスキーの魅力を人類が捨てることはないという確信のようなものを今回の視察で持つことができた。ヨーロッパでは高標高地に雪を求めているが、日本列島の北部とスキーの可能な気象の 500M～2000M の標高の山岳地帯には、季節風による降雪が高い確率でもたらされる。
従って地球温暖化の中でスノーリゾートとして存在していくために必要な降雪量が期待できるかを慎重に見極めたうえで、そのエリアでこれからの時代にどのような雪の楽しみ方が求められるかを、既成概念を捨てて徹底的に考え抜いて様々な計画を立て、必要となる環境要素をデザインしなおし、 時代に通用するリゾートに変身できれば、 世界をマーケットとして日本のスノーリゾートのある程度は再生できるのではないか。
　現在野沢温泉など限られたスノーリゾート地が再生への軌道に乗り始めているが、真剣に取り組めば全国で何か所かは「正常進化」できる可能性を持っていると考えられる。決してスノーリゾートの未来は暗いばかりではないだろうと思う。

　蛇足ながら今回の視察はバブル経済に酔った一時的な繁栄がいかに危険なものか、その結果が如何に人の目を曇らせるか、などについて改めて考える機会にもなった。WiLL 事務局長としての仕事をしながら、正直に言ってスキーの将来の継続性についての疑問を抱いていた小生もやはり目が曇ってしまっていたようだ。
近年世界の先進国はこぞって超低金利策を採り、世の中に（何でもよいから）投資を促そうという経済政策を取り入れているが、それでも狙ったような景気の浮揚はできないでいる。各国ともバブルを促進して何とか景気を盛り上げようとしていると言ったら言い過ぎであろうか。　バブルを狙っての景気浮揚策に乗ろうとしない経済界や企業は、もしかするとかってより賢くなっているからであり、そう考えると国の政策に反応がないことは長期的に見れば良い現象だと考えたくもなる。
日本のスキー産業はバブルに酔って一時的な繁栄を謳歌した後の悲惨な状況を見事に見せてくれた。このような轍を踏まないように、日本政府も早く気が付いてほしいものだ。

「見たことしたこと」白石回想録―10

パラナ州カンポモロンから暮れにサンパウロに戻りました。12 月は何処を歩いていても「オ　バルキーニョ」という音楽が流れていました。年明けとともにサンパウロで経済関係のレクチャーを日系の商工会議所、新聞社などから受けました。その後で現地大学生との交換会、ウルップブンガ地下水力発電所、ワーゲンなど最新の施設・工場などの見学をしました。帰国までできるだけ多くを見て回ろうとまずは一人で、サンパウロからパラナ州のクリチーバ、サンタカタリーナ州のフロリアノポリス、リオグランデドスル州のポルトアレグレ、ウルグァイのモンテビディオ、アルゼンチンのブエノスアイレスを見て回りました。この旅で私にはとても無理だと思ったのがポルトアレグレに駐在している三井物産社員の仕事ぶりを見たときです。ホテルの 1 室を滞在場所兼事務所代わりにして日本との時差のある中昼夜を分かたず 1 人で仕事に取り組んでいる姿を見た時です。
戦後の日本の急速な復興はこのような人たちの支えが在ってでしょう。

サンパウロに戻り今度はすぐにリオのカーニバルを観に行きました。映画黒オルフエの通り、町中がサンバのリズム、路面電車やバスの中の手すりも何も全部が楽器になります。ホテルに戻ってきても叩いて音の出るものはすべてリズム楽器になります。大変な熱気でした。
サンパウロに戻ると今度は日大の佐藤義勝さんが次は一緒に連れて行ってほしいと言うので彼と出かけました。彼はコチアという日系最大の農業協同組合に席を置いていたので日本語だけですむ生活をしていたのです。余談ですが彼は私よりも 5 歳年長、大学は裏表 8 年間在籍するつもりが 7 年目には卒業させられてしまいました。彼は一度帰国、その後すぐにアメリカの牧場に実習生として行きました、彼の実習先は大牧場でその一部を一人で管理することになりました。
此処でも彼はひたすら日本語、来る日も来る日も語り掛ける相手は牛だけです。呼び寄せることからすべてが日本語、彼が帰国する時次に来た牧童が英語で牛に指示を出しても牛たちは反応せず、日本語だと指示通り動くので牧童から頼まれて和英辞典もどきを作り管理の引継ぎをしたそうです。
彼とはサンパウロから列車で 27 時間マットグロッソ州のクイアバーまで行きました。検札が何度も来ます、出発の時の切符は穴だらけになり文字など全く読めなくなりました。記念にとっておいたのですが今思い出して探したのですが見つかりません。クイアバーからバスで 1 日さらに奥のカンポグランデへ、此処から

は飛行機でブラジルの首都となる建設中のブラジリアに行きました。途中 空から見るパンタナールの景色は素晴らしいものでした。 ブラジリアは建設中でしたから埃とコンクリートが印象として残りました。 美しくアメニティーの整ったリオで暮らしている議員や公務員が本当にこんなところに移ってくるのか疑問に思いました。ブラジリアからバイ―アまでの飛行機は今までの DC－3 という古い機体ではなくターボプロップ（日本の作った YS－11 のエンジンと同じタイプ）の機体でした。バイ―アはリオデジャネイロに首都が移る前まで首都でした。 室内金箔張りの教会がいくつかあります。私にとってはここバイ―アが 日本の京都のようにブラジルの雰囲気を一番感じる街でした。

サンパウロに戻ると今度は帰国の準備です。日本を出る時は　最後でしたが帰国は最初に日本に戻り受け入れの準備をして欲しいと頼まれました。 船はサントス港からサントス丸という移民船です。私には別途、祖母を殺したので強制送還になるという若い男性を頼むと託されました。移民船は 2 段のカイコだな 。
私の真上が彼の寝床で、笑っているのか顔が引きつっているのか、それに時々「キー」とか「クエー」とか奇声を発するので落ち着かない船旅になりました。
パナマ運河は期待の通り構造も運営も素晴らしい。今ももう一度訪れたいところです。パナマはスペイン風の街でした。船がロスアンジェルスの港に入る景色には圧倒されました、海岸にそって緑の芝生その芝生にスプリンクラーで水を撒いているのです、さらに驚いたのは銀行には 1 ドル銀貨が積み上げてありました、この銀貨の発行年度を見ると日本ではお寺の鐘など金属類はすべて兵器を作るために供出させられ、手榴弾も陶器製になるところまで物資不足になっていたのに 1944 ～ 45 年に発行されている銀貨がそれ以前に発行されていた銀貨と全く変わっていないのです。なんでこんなに国力差があるのに日本はこのアメリカという国と戦争をしたのか、当時の国のリーダーは無知の中感情に身を委ねてしまったことは恐ろしいことだと思いました。サンフランシスコではすでにほとんどお金を使い果たしてしまっていたのでゴールデンゲートブリッジから対岸を眺めていました。　そこに年寄りの婦人が私に寄って来ました、私が日本人だとわかると「あなた方は私たちの国によって解放された、だからあなたは今ここに居ることができる」などと話し、その後 10 ドル くれました、そのお金で バスに乗り対岸に渡り戻ってくることができました。
サンフランシスコから船はさらに北上荒れる北の海を突っ切り日本へ最短距離で向かいました。陸地が見えた時日本は緑というより黒く見えるほど木々が生い茂っていました。日本は本当に豊穣の国だと感じました　横浜では参加した大学の居残り組の人たちから大歓迎を受けました。 1962 年の年明けからは私が出した手紙がブラジルに居る我々の様子がわかる唯一の手がかりだったそうです。
在京の幹部の人達に一通りの報告をしたので、次は自分のことに取り組みました。帰国後すぐに学習院院長の安倍能成（あべよししげ）さんを訪問、出国直後にすぐに学業に戻れという手紙のお礼をし、院長からは勉強をしなさいという訓示をもらいました。

＜編集後記＞

韓国の新大統領が決まった。 親北朝鮮、反米国の政策を国民が選択した。朝鮮半島は統一の方向に動いていくだろう。 隣国は常に憎悪の対象である。 日本にとっての正念場をむかえた。日本人のアイデンティティを自覚する機会となってほしい。　　渡辺勝範

SORUCA のホームページの画面です。　http://sorca.p2.weblife.me/

「特定非営利活動法人ソフトインダストリー研究会」広報誌

SORUCA 通信（2017年春号　）

発行責任者　白石　嘉宏
発　行　所　NPO ソフトインダストリー研究会
東京都新宿区矢来町 47 番地
TEL: 03-3266-1769
FAX: 03-3266-1764
http://sorca.p2.weblife.me/
編　集　人　渡辺　勝範・長谷川　毅
発　行　日　2017年5月9日

高田でスキーを教えたオーストリア武官のレルヒ少佐から頂いた一本杖で志賀高原で滑る 麻生武治氏(長谷川毅の義父)

NPO/ SORUCA NonProfit Organization/Soft Resouces of Urban and Country Association

発行元 :NPO ソフトインダストリー研究会